

43 障害児のきょうだい支援ワークショップの効果

研究所 北村弥生、沖縄県立看護大学 上田礼子

はじめに 特殊なニーズがある子どもの同胞の課題解決に対しワークショップが効果あることは古くから報告されている。同胞の課題とは、特殊なニーズがある子どもの家族であることによって生じる特殊な感情や体験である。たとえば、親の注意が特殊なニーズがある子どもに集中することや親亡き後の不安である。シブシブは、米国で開発された学童期の同胞を対象として、遊びと討論を実施することに特徴があるワークショップモデルで、同胞同士の交流、特殊な感情、経験、課題への対処方法の交換を行なうことを目的とする。我々は平成14-15年度にシブシブをモデルにしたワークショップを実施したので、その効果を報告する。ただし、この期間中の試行では討論の時間は設けなかった。

方法 埼玉県西部にある知的障害児を対象とした養護学校（小学部から高等部）7校と就学前通所施設4施設に在籍する児童、生徒約700人の同胞に質問紙とシブシブの応募用紙を送付し、シブシブへの参加者を募集した。2年間に4回試行したシブシブへの参加者のうち参加前に質問紙に回答した者に、4回実施後に同様の内容の質問紙を郵送し返送を求めた。参加者の保護者には、シブシブ実施後に毎回、子どもに変化があったか否かを質問紙による調査を行なった。スタッフには、4回終了後に、プログラムの評価を主にした質問紙による調査を行なった。

結果 1) 参加者14人から回答があった。きょうだいがよく出会う課題についての質問群への回答は、多くの領域において、前向きに変化した。

2) 参加者から評価が高かったプログラムは、身体を動かす激しいゲーム、昼食と自由時間、普通のゲーム、発言を伴うゲーム、自己紹介であった。「予定通りに進行しなかった」とスタッフが回答したプログラムに対する子どもからの評価は予想に反して高かった。

3) 保護者の調査結果から、参加後に親と同胞の間で障害についての話題が、夫婦の間で同胞の話題が増えたことがわかった。

考察 ワークショップ参加者と保護者に障害について前向きの変化が生じたことが明らかになった。また、参加者が他の行事よりもシブシブを選択したことは評価される。しかし、ワークショップの開催は18か月の間に4回であるため、変化にワークショップが直接にはたらくているとはいいいにくい。自然な経年変化と比較することが必要であると考えられる。